



空飛ぶ赤鬼

草野あきこ

川野隆司・絵



時計が夜の十二時をまわり、北の国のサンタクロースの家では、サンタクロースとトナカイがちょうど新年のあいさつをしようとしているところでした。

ドドッ、ドドドーン。

突然の地響きにおどろいて飛び出すと、一本角の赤鬼が雪のうえにうずくまり腰をさすっていました。

「赤松^{あかまつ}さんじゃないかね」

「赤松さんだ！」

「エへへ、こんどはおれが空から落っこちまったな」

赤鬼の赤松は立ちあがって、白い袋を差しだしました。

「あけましておめでとーう、サンタにトナカイ」

一週間ほどまえのクリスマスイブの夜は、とても静かで

した。深い雪に覆われた山奥の洞窟で眠っていた赤松は、ドーンという大きな音で目を覚ましました。

「なんだ、今の音は！」

外を見てみると、洞窟のまえの積もった雪に穴があいていました。その穴から赤いうでがにゅっと出てきたのです。「あ、赤鬼だ。……となり山のおじさんかい？ それとも、いとこの赤太郎かい？」

穴からヨイショと出てきたのは、赤い服に赤いぼうしのおじさんでした。おじさんは服の雪をはらい白くてりっぱなひげを整えると、目の前の赤松に気づき、ニッコリわらって片手をあげました。

「ホッホウ、メリークリスマス」

あっけにとられていた赤松は、ハッとわれに返りました。